

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 9 月 7 日現在

機関番号：32675

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25284021

研究課題名(和文) ポスト3・11的危機からみる 理性 欲求 市民社会 の再審

研究課題名(英文) Reexamination of Reason, Desire, and Civil Society in terms of "Post 3.11 Crisis"

研究代表者

鈴木 宗徳 (SUZUKI, Munenori)

法政大学・社会学部・教授

研究者番号：60329745

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,700,000円

研究成果の概要(和文)：2011年の東日本大震災と福島第1原発事故は、戦後日本社会が直面する危機的状況を露わにしたが、この「ポスト3・11的危機」は近代社会の普遍的問題の先鋭化であったと言える。本研究は、**理性 欲求 市民社会** という思想史上の三つの基本概念の再検討を軸として、こうした危機の思想史的意味を明らかにしようと試みた。研究成果として、26名の執筆者が寄稿した『危機に対峙する思考』を共同で刊行した。本書は「問題としての認識と方法」「理性の光と影 啓蒙主義とその批判」「批判的思考の生成する場」「民主主義と日本社会への視座」の4部から構成され、日本社会が直面する危機を思想史研究の立場から分析している。

研究成果の概要(英文)：The Tohoku Earthquake and the Fukushima No.1 Nuclear Power Plant Accident of 2011 exposed a critical situation the postwar Japanese society has been faced by. This "post 3.11 crisis" can be considered as an extreme case of universal problems in the modern society. This study tries to clarify the meaning of this crisis in terms of the history of ideas, centering on the reexamination of three basic categories: reason, desire, and civil society. As the main research product we published a collaborative book "Thoughts Confronting Crisis" (Kiki ni Taijisuru Shiko) in collaboration with 26 coauthors. It analyses Japanese society facing actual crisis. It consists of four parts: "Cognition and Method as Problem", "Light and Shadow of the Reason: Enlightenment and its Critics", "Places Where Critical Thoughts Are Created", and "Democracy and Perspectives on Japanese Society".

研究分野：人文学

キーワード：3・11 危機 理性 欲求 市民社会

1. 研究開始当初の背景

現在の日本社会が直面する危機を概念的・思想的に捉え直すには、現在の社会変容がもつ思想的意味の再検討が不可欠である。本研究は、以下の「ポスト3・11的危機」を出発点として、理性、欲求および市民社会について思想的に再検討する。

(1) 「ポスト3・11的危機」の第1局面は、原発が生み出す大量の電力を支えとする科学技術文明の危機であり、ひいては理性と欲求の危機である。

かつて啓蒙的理性は、外的自然を人間の統制下に置くことで人間社会の進歩を実現するという信仰を生み出した。そして理性信仰は、「豊かな社会」を欲する人々の欲求を支えに今日まで社会を突き動かしてきた。他方でこの実証的・科学的理性信仰に対し、哲学はたびたび警鐘を鳴らしてきた。アドルノとホルクハイマーは、自己保存の欲求をてことする理性の暴力性が、外的自然や社会だけでなく、当の自己の内なる欲求にまで及ぶことを指摘していた。今回の原発事故が露わにしたのは、まさに、この理性の暴力性であった。その結果、もはや「実証的・科学的理性が人々の欲求を実現する」という、近代的な理性と欲求の関係が破綻したと言える。

(2) 「ポスト3・11的危機」の第2局面は、民主主義の正当性とその基盤をめぐる危機であり、すなわち理性と市民社会との危機である。

かつてヘーゲルは、欲望の体系としての市民社会の矛盾を、理性の担い手たる国家官僚制が止揚すると捉えた。またヴェーバーも、近代国家の民主化と資本主義経済の発達にともなって形式合理的な国家官僚制の影響力が拡大すると予想した。だが、原発事故が露呈した原子力政策の絶望的な混乱は、かつて絶大な信頼を誇った日本の官僚制が、もはや最低限の合理性さえ喪失したことを示している。また、脱原発を進める欧州諸国が下した合理的な政治判断と対比するならば、「原子カムラ」をはじめ既得権益に縛られた日本の官僚制が、もはや市民社会の矛盾を解決する理性の担い手たり得ないことを露わにした。

こうした事態は市民社会における合意形成に深刻な危機をもたらす。国家官僚制や「科学知」が深刻な不信にさらされ、合意形成の基盤としての理性への信仰が解体した結果、理性的な対話よりもデモなどの直接行動が台頭することとなった。こうした動きは、民主的な合意形成という近代市民社会の最重要課題が根底的な再審を必要とする証左である。

(3) 「ポスト3・11的危機」の第3局面は、社会的な連帯と分断/排除との矛盾であり、

すなわち市民社会とその基盤をなす欲求との関係における危機である。

かつてアダム・スミスやルソー、カントが論じたように、近代市民社会の基礎には、他者との共感と連帯を求める人間の本源的欲求が想定されてきた。そして東日本大震災以降繰り返される「絆」の強調は、一見この欲求の再浮上に見える。また反原発デモの巨大なうねりは、新しい政治参加と連帯への欲求が具体的な形を獲得しつつあることを示唆している。

しかしその一方で、この間注目されてきたのは、「孤独」や「孤立」、「無縁社会」といった認識であった。なかでも日本の地域コミュニティは、高齢化と人口減少によってすでに崩壊寸前であったが、震災後、とくに東北の地域再生は遠のいたままとなっている。こうした事態は、市民社会の根底にあるはずの、共感と連帯への欲求の「本源性」に対して深刻な問いを投げかけている。

2. 研究の目的

以上のように、「ポスト3・11的危機」は、いずれも近代社会に生じる普遍的な問題であると同時に、特殊日本的な近代化の文脈の中で捉えるべき問題でもある。一方では、理性欲求市民社会がもつ両義的な価値について、個別の思想家のテキストに即した研究が必要とされ、他方で、現代日本の「危機」や「転換」に関する客観的・実証的な把握が必要となる。本研究は、双方の研究手法を視野に収めつつ、戦後日本社会が転換期にさしかかっているという認識のもと、理性欲求市民社会という三つの基本概念の現代的意義を明らかにする。

3. 研究の方法

領域/問題群ごとに、7~9名ずつの研究班を構成する。また、メンバー全員が参加する合同研究会を半年に1回のペースで開催し、各班の研究成果を総合的に検討する。さらに、思想史研究に必要な資料収集等のため、海外の研究機関に赴いて調査をおこなう。公開講演会等も開催する。

4. 研究成果

(1) 研究代表者とすべての研究分担者、そして研究協力者8名が寄稿した論文集、『危機に対峙する思考』(梓出版社)を刊行した。4部構成・全26章からなる本書のうち、研究代表者と研究分担者が執筆した章の概要は次のとおりである。

第1部「問題としての認識と方法」
大河内泰樹「知識の社会性と科学的認識
科学批判としての批判理論の再構築のために」

本章は1970年代半ば以降の批判理論が科学批判から後退したという認識から、ハーバースの「真理理論」を出発点に、ブランドムの知識論を導入しながら、科学理論を言語

論、とくに語用論から理解し、これを社会の中に位置づけることで、批判理論にもう一度科学批判を取り入れる一つの方向性を示すことを試みる。

村田憲郎「フッサールと知識の哲学 明証の原理による内在主義と外在主義の接合の試み」

本章では、フッサールの空虚志向の充実化による認識論を、英米系の知識の哲学の議論に引きつけるという近年のフッサール研究の動向を踏まえつつ、認識論的な内在主義と外在主義とをある仕方で橋渡しする議論として位置づける。その際、主にフッサールの「明証」概念と、フッサールが「諸原理中の原理」と呼んだ明証の原理の理論的意義に注目する。

橋本直人「ウェーバーはなぜ『社会学』者になったのか 危機に対峙する選択としての方法論」

マックス・ウェーバーは今でこそ社会学の古典として認知されている。だが当時の状況にてらせば、自らの学問を「社会学」と名づけるのはウェーバーにとってリスクをはらんだ選択であった。本章ではこの選択をテキストに即して分析し、その背後にあるウェーバーの危機意識、特に自然科学主義の一元論との対決という問題意識を明らかにする。

菊谷和宏「世俗の祈りとしての実証科学 社会における事実をめぐる」

本章は、19世紀フランスの二人の知識人、ゾラとデュルケームの実証主義に関する言説を、第三共和制・ドレフュス事件といった時代背景と共に検討する。その結果、確固たる「事実」を見出しこれを科学的言説の基盤とすることを目指す実証主義の探究は、自らの主張を裏切って世俗における「祈り」とならざるをえないこと、しかしこの祈りこそ、社会科学を基礎付ける超越的かつ経験的な人間性としての意志の表れであることを示す。

杉本隆司「震災と社会学 オーギュスト・コントの実証主義再考」

3・11の震災以降、科学者と社会をめぐる多くの問題が提起されたが、その一つに人々が危機的状況で信じるに足る根拠はなにかという「信の在りか」の問題がある。本章では、原発震災を手掛かりに、科学的合理性とは別な社会的合理性の発想から、科学組織と社会、科学者と市民の知識の落差、権威の所在といった問題について信頼論を軸にしながら、コントが唱えた社会学の本来的な構想を明らかにする。

第2部「理性の光と影 啓蒙主義とその批判」

田中秀生「政治体とルソー的<中間>」

ルソーは人間の幸福や理想社会に関する記述のなかで、相反する二つの状態から善きもののみを抽出し両立させた状態を<中間>として描いている。ほんらい不可能なこの理想的状態には、ルソーという思想家のさま

ざまな本質が映し出されている。本章は、この<中間>の内容と意味を考察し、ルソーの政治思想の一側面を明らかにすることを試みる。

小谷英生「クリスティアン・ガルヴェと観察の論理」

本章は、ドイツ後期啓蒙主義の代表的な哲学者クリスティアン・ガルヴェを取り上げ、彼にかんするシュライエルマッハーの否定的評価、フォーヴィンケルの肯定的評価をそれぞれ批判的に検討する。そのうえで、彼の「自己観察」と「関心」概念を分析することによって、まったく新しい、かつアクチュアルなガルヴェ像の再構築を試みる。

佐山圭司「『信』への『死の跳躍』 『時代の精神形成の転回点』としてのフリードリヒ・ヤコービ」

「反啓蒙」の思想家として知られるフリードリヒ・ヤコービが目指していたのは、合理性一般の否定ではなく、すべてを合理的に論証・説明しようとする「体系哲学」の批判であった。本章では、「死の跳躍」というキーワードを手がかりにヤコービの思想を検討しながら、彼の問題提起が次の世代に与えた影響を概観する。

中村美智太郎「近代における公共性の原理

シラーにおける『理性からの距離化』と『美的主観性』」

書簡体形式で発表されたシラーの美的教育思想は、近代における国家及び公教育に対抗しうる原理としてコーヒーハウスやサロン等で育まれた市民社会的「公共性」の原型とみなすことできる。本章は、ボーラーの「美的主観性」の視点を援用しながら、近代郵便制度を背景に発展した新しいメディアとしての「書簡」によって生まれる新たな主体の形成を、シラーがいかに構想していたかを考察する。

第3部「批判的思考の生成する場」

高安啓介「建築における批判的地域主義」

本章は、1980年代より議論されるようになった批判的地域主義を扱う。これは、近代建築のかかげる普遍主義にたいして異をとえながら、商業主義・民族主義・大衆主義のもとでの地域の主張にたいしても疑いの目を向け、生活者の解放をうながそうとする主張でもあったとされる。建築における批判的地域主義がいかなる背景のもとで主張されるようになったのが検討される。

荒川敏彦「『儒教と道教』における神義論問題のゆくえ 現世の不正に対する儒教的応答にヴェーバーは何を見たか」

本章によれば、ヴェーバーは、儒教が公式上は平等を唱える一方で、実際には君子と大衆とを区別する身分倫理と、自己責任を求める応報思想とが結合していると見ていた。君子を宿命に耐える精神へ、大衆を事態打開のための自助努力へと駆り立てるその神義論が、儒教論を超えて、特権者に優位な官僚制を倫理的に正当化する論理でもあること

を、本章は指摘している。

鈴木宗徳「自らを劣っていると認識させることについて 救貧法改革とマルサスおよびベンサム」

本章は、資本主義の勃興を説明するうえで、勤労倫理を貧困層に普及させたイギリス救貧法、とくに 1834 年改正の劣等処遇の原則がとくに重要であると論じている。さらに、その背景にあるマルサスやベンサムによる貧民を怠惰とみなしスティグマを与える思想、マルサスの出産抑制の思想が、現代の福祉改革をめぐる議論にも通底するものであると主張される。

佐々木隆治「新自由主義をいかに批判すべきか フーコーの統治性論をめぐる」

本章の目的は、フーコーの統治性論における新自由主義論を手がかりにして、新自由主義ないし新自由主義「批判」について批判的に検討することである。福祉国家から新自由主義へという通俗的な図式においてではなく、自由主義との対比において新自由主義を理解することによって、既存の新自由主義論が看過しがちな点を浮き彫りにすることが試みられる。

第 4 部「民主主義と日本社会への視座」
平子友長「戦前マルクス主義哲学の遺産とそのアクチュアリティ」

いかなる社会理論もその歴史的役割と意義を持つ。本章では、マルクス主義の日本近代において果たした歴史的役割が論究される。社会科学の近代モデルとして受容されたマルクス主義は「講座派」マルクス主義に至って日本の近代化を推進する役割を担うが、戦後高度経済成長の中で起きた日本の前近代の崩壊と大衆社会統合に対応することができず、その歴史的役割を終えたことが示される。

水野邦彦「敗戦後日本・解放後朝鮮の社会意識形成」

1945 年の日本の敗戦と朝鮮の解放を境として、社会意識において日韓は互いに異なる変化を遂げた。敗戦を経ても人々の現状肯定的生活保守主義は変わらず、根底的に戦前・戦中と連続している日本と、反共親米・親日の独裁政権のもとで行われた大衆操作により、生存を賭けて「反共」で結束させられた韓国の違いが、対比的に論究される。

景井充「『危機』の根源へ 日本社会・文化的脊梁としての『身分制』」

デュルケムが社会学的認識の本質的把握態として提起した「生来的構造」という観点に立って日本社会の文化と歴史の推移を見通してみると、日本社会の脊梁たる「身分制」に行き着く。本章では、戦後日本社会の身分制的編成を確認したうえで、新自由主義に基づく日本社会の再編成は近代的諸価値を実現する方向へは進んでおらず、むしろ「身分制」的社会統合の“再編”過程にあることこそ「危機」であることが論じられる。
名和賢美「ギリシア・ローマの弁論術を受け

継ぐ市民教育の可能性」

本章では、ギリシア・ローマに発する弁論術が批判的思考力や論理構成力の養成に関して現代もなお意義を有するものであることが論じられる。豊富な経験を踏まえ、大学生を対象として型作文指導を行うことにより、具体的な市民教育を行い、市民社会の底上げが実現できることが説かれる。現代的「危機」に対し、市民的能力の地道な養成の取り組みは重要である。

赤石憲昭「丸山眞男の民主主義論の再検討

日本の民主主義の危機的状況の理解と打開のために」

本章は、民主主義の「危機」に際会している現代日本の状況において、丸山の民主主義論の有効性を確認する。議会制度の実質化を進めるためになすべきこと、日本は憲法九条の理念と終戦の日の持つ意義を決して忘れることなく平和の実現に向けて積極的に行動すべきこと、今日的ファシズムの進行に対抗すべきこと、こうしたことが原理的レベルで検討され、丸山の民主主義論がなお有意義であることが再確認される。

(2) 以下の海外の機関に赴いて調査を行った。水野邦彦は、韓国・世宗特別自治市の国立世宗図書館、永豊文庫、教保文庫で社会統合関連資料を調査した。杉本隆司は、フランス国立図書館およびオーギュスト・コント記念館で、コントの出版著作と彼の所蔵目録の調査を行った。中村美智太郎は、ドイツ・フランクフルトにあるドイツ国立図書館やデュッセルドルフにあるハイネ研究所へ行き、ドイツの理性・感性についての関連資料を収集するとともに、研究交流を図った。

(3) 2015 年 10 月 14 日、トゥール大学ジュリエット・グランジュ教授をお招きして「サン＝シモン 自由主義と社会主義のあいだ」と題する公開講演会を開催した。その狙いは、震災以降の人々の社会的な紐帯のあり方から、ひろく今日の社会的貧困や格差の問題まで原理的に考えるためのモデルとして、産業社会の弊害とその処方をも早くから論じていた 19 世紀前半のフランスの思想家サン＝シモンに改めて焦点を当てることにあった。講演では、彼の思想にはマルクスよりも個人主義的な要素がある一方、その組織論（アソシアシオン論）が自由主義者や功利主義とも一線を画することを中心にお話しいただいた。アソシアシオン論は個人と企業だけでなく、家族や地域（コミュニティ）といった日常の幅広い関係までを包含し、サン＝シモンの思想に即して現代の社会主義のイメージを刷新しようというご講演であった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 17 件)

Keisuke Takayasu, The Development of Design Education for Children in Japan,

The Journal of the Asian Conference of Design History and Theory、査読無、1、2016、pp.95-103
橋本直人、マックス・ウェーバーにおける行為論の転換と貨幣論：『経済と社会』改訂に関する一考察、社会学史研究、査読有、37、2015、pp.59-74
佐々木隆治、物象化論と『資本論』第一部第一篇の理論構造、季報唯物論研究、査読無、132、2015、pp.12-22
小谷英生、カント『世界市民的見地における普遍史のための構想』の思想的分析【人間の使命 論争、メンデルスゾーン、ガルヴェ】、社会思想史研究、査読有、39、2015、pp.72-91
田中秀生、政治体の成立とルソー的 中間、太成学院大学紀要、査読無、17、2015、pp.67-75
平子友長、三木清の思想の基本構造と問題点、季論 21 2014 年春号、査読無、24、2014、pp.169-179
佐山圭司、現代の貧困問題と市民社会の役割、ヘーゲル哲学研究、査読無、20、2014、pp.24-33
赤石憲昭、ヘーゲルの男女観・子ども観をどう捉えるか？ヘーゲル家族論の再検討、ヘーゲル哲学研究、査読無、20、2014、pp.10-23
名和賢美、アカデミックに固執しない日本語リテラシー教育の可能性、立命館大学教育開発推進機構ニュースレター、査読無、30、2014、pp.5-5
杉本隆司、権威と信頼の政治学 A・コントの初期論集を読む、社会学史研究、査読有、36、2014、pp.91-106
中村美智太郎、災害の倫理 カタストロフへの「予防接種」と崇高な主体、文化と哲学、査読有、31、2014、pp.41-55
景井充、デュルケム社会学を社会思想として捉えなおす デュルケム道徳社会学は何を目指したか、立命館産業社会学論集、査読無、50-2、2014、pp.55-67
水野邦彦、敗戦後日本社会の形成、経済論集（北海学園大学経済学会）査読無、61-4、2014、pp.95-108
村田憲郎、「实在概念」としての範疇 プレンターノ『存在者の多義性』に見る存在論、フッサール研究、査読有、11、2014、pp.38-55
荒川敏彦・下村育世、戦後日本における暦の再編（1）「迷信的」暦註の禁止と復活、千葉商大紀要、査読有、51-2、2014、pp.37-58
菊谷和宏、永井荷風のフランス受容とその社会思想的含意、和歌山大学経済学会研究年報、査読無、17、2013、pp.31-61
大河内泰樹、形而上学批判としての形而上学 哲学史的コンテクストにおけるヘーゲル論理学、ヘーゲル哲学研究、査読無、19、2013、pp.72-82

〔学会発表〕(計9件)

Tomonaga Tairako、A Turning Point in Marx's Theory of Pre-capitalist Societies: Marx's Excerpt Notebooks on Maurer in MEGA IV/18、The Annual Conference for Historical Materialism、2015年11月7日、ロンドン(英国)
橋本直人、テキスト・現実・個別性: E. サイドとポストコロニアリズムにおける文化の両義性、唯物論研究協会第37回大会、2015年10月18日、群馬大学(群馬県前橋市)
Munenori Suzuki、Individualization as Governing through Division: A Comparative Study、13th Meeting of German-Japanese Society for Social Sciences、2015年10月9日、German Institute for Japanese Studies(DIJ)(東京都千代田区)
田中秀生、<自然な社会>と人為の隠蔽について、言語文化研究会、2015年9月20日、上智大学サテライトキャンパス(大阪府大阪市)
赤石憲昭、若者とケータイ時代の承認、現代社会研究会(第1回公開シンポジウム「若者の現在:安心・承認・成長をめぐる」)、2014年12月20日、日本福祉大学名古屋キャンパス(愛知県名古屋市)
荒川敏彦、マックス・ウェーバーにおける神義論問題と『儒教と道教』、日本宗教学会、2014年9月13日、同志社大学(京都府京都市)
中村美智太郎、公共性とコスモポリタンシティズンシップ教育の可能性、フォーラム・ドイツの教育、2014年7月19日、明治大学駿河台キャンパス(東京都千代田区)
Hideo Kotani、Permissible Use of new Reproductive Technologies from the Viewpoint of Justice、Workshop: Zur Aktualität des Würdebegriffs、2014年1月1日、Heinrich-Heine Universität Düsseldorf(ドイツ)
水野邦彦、日本社会の歪みを照らしだす朝鮮、唯物論研究協会第36回研究大会 第2分科会(戦後日本と朝鮮)、2013年10月20日、岐阜大学(岐阜県岐阜市)

〔図書〕(計8件)

平子友長・橋本直人・佐山圭司・鈴木宗徳・景井充・筒井淳也・磯直樹・前田泰樹・大河内泰樹・村田憲郎・南孝典・菊谷和宏・杉本隆司・田中秀生・上杉敬子・小谷英生・中村美智太郎・高安啓介・白井亜希子・福島知己・荒川敏彦・佐々木隆治・阿部里加・水野邦彦・名和賢美・赤石憲昭、梓出版社、危機に対峙する思考、2016年、598
田中拓道編著・大河内泰樹・岡崎龍・後

藤玲子・加藤泰史・日暮雅夫・ティート
ウス・シュタル・徳地真弥・山田哲也・
神代健彦・中澤篤史・鈴木直文・井上睦・
森千香子・村上一基・湯川やよい、法政
大学出版局、承認 社会哲学と社会政
策の対話、2016、433 (39-63)
Yoichi Kubo, Seiichi Yamaguchi, Keiji
Sayama 他 12 名、LIT Verlag、Hegel in
Japan. Studien zur Philosophie Hegels、
2015、232 (23-38)
宇野重規・伊達聖伸・高山裕二・川上洋
平・片岡大右・杉本隆司・数森寛子・赤
羽悠、白水社、共和国か宗教か、それと
も 十九世紀フランスの光と闇、2015、
300 (153-186)
鈴木宗徳・伊藤美登里・石田光規・野尻
洋平・仁平典宏、勁草書房、個人化する
リスクと社会 ベック理論と現代社会、
2015、336 (i-iv, 1-24, 92-118, 221-255,
297-310)
菊谷和宏、講談社、「社会」(コンヴィヴ
ィアリテ)のない国、日本 ドレフュ
ス事件・大逆事件と荷風の悲嘆、2015、
248
高安啓介、みすず書房、近代デザインの
美学、2015、304
韓立新・大村泉・渋谷正・渡辺憲正・平
子友長ほか、北京師範大学出版社、当代
学者視野中的馬克思主義哲学 日本学者
巻、2014、583 (507-520)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

鈴木 宗徳 (SUZUKI, Munenori)
法政大学・社会学部・教授
研究者番号：60329745

(2) 研究分担者

平子 友長 (TAIRAKO, Tomonaga)
一橋大学・大学院社会学研究科・特任教授
研究者番号：50126364

水野 邦彦 (MIZUNO, Kunihiro)
北海学園大学・経済学部・教授
研究者番号：90305897

景井 充 (KAGEI, Mitsuru)
立命館大学・産業社会学部・教授
研究者番号：30340483

橋本 直人 (HASHIMOTO, Naoto)
神戸大学・人間発達環境学研究科・准教授
研究者番号：80324896

佐山 圭司 (SAYAMA, Keiji)
北海道教育大学・教育学部・准教授
研究者番号：80360965

田中 秀生 (TANAKA, Hideo)
太成学院大学・人間学部・講師
研究者番号：70388669

菊谷 和宏 (KIKUTANI, Kazuhiro)
和歌山大学・経済学部・教授
研究者番号：40304175

高安 啓介 (TAKAYASU, Keisuke)
愛媛大学・法文学部・准教授
研究者番号：70346659

村田 憲郎 (MURATA, Norio)
東海大学・文学部・准教授
研究者番号：80514976

名和 賢美 (NAWA, Kenmi)
高崎経済大学・経済学部・准教授
研究者番号：40361860

杉本 隆司 (SUGIMOTO, Takashi)
法政大学・講師
研究者番号：80509042
(平成26・27年度のみ)

大河内 泰樹 (OKOCHI, Taiju)
一橋大学・大学院社会学研究科・教授
研究者番号：80513374

荒川 敏彦 (ARAKAWA, Toshihiko)
千葉商科大学・商経学部・准教授
研究者番号：70534254

佐々木 隆治 (SASAKI, Ryuji)
立教大学・経済学部・准教授
研究者番号：40722517
(平成27年度のみ)

赤石 憲昭 (AKAISHI, Noriaki)
日本福祉大学・子ども発達学部・准教授
研究者番号：50711058

中村 美智太郎 (NAKAMURA, Michitaro)
静岡大学・教育学部・講師
研究者番号：20725189
(平成26・27年度のみ)

小谷 英生 (KOTANI, Hideo)
群馬大学・教育学部・准教授
研究者番号：80709147

磯 直樹 (ISO, Naoki)
大阪市立大学・大学院文学研究科・博士研
究員
研究者番号：90712315
(平成26年度から研究協力者)